

一月

記 者

○四方拜 我國三大節の一。元旦の拂曉 天皇神嘉殿に臨御して、伊勢兩宮、天神地祇、神武天皇御陵、明治天皇御陵、武藏氷川神社、賀茂兩社、男山八幡宮及び熱田、鹿島、香取の三社を拜して太平を祈りたまふ。當日午前四時神嘉殿神樂舎に簀薦を敷き、四尺の屏風を立て、御座を設け、燈臺二基を供ふ。五時出御、御拜訖つて、賢所を拜し、入御したまふ。

○元旦 高臺に登つて初日の出を拜すれば諸事吉なりといふ。又惠方詣りと稱して、其年の歲徳神に詣で、福を授からうとするものもある。

○初夢 寶貨を載せた船を繪に描き、枕の下に敷いてよき夢を結ぶ。寶船の繪の傍に書いてある、「なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」といふ歌は上から讀んでも下から讀んでも同じである。守貞漫稿

に「此歌全浙兵制の附録日本風土記に見えて琴譜也と云」と書いてある。七福神と猿を描いた寶船もあるといふ、善い夢を見損つたら猿にその夢を食べて貰はうといふのである、用意周到なわけである。

○消防出初め 水柱の偉觀。梯子のぼりの離れ業。「め組の喧嘩」の世界に住む兄哥達の氣ほひの木遣節。板のやうに剛ッぱしい半纏。新しい手拭の鉢卷。鳶口の光り。

○陸軍初め 八日觀兵式舉行、

○七草粥 七日の朝、七草とて芹、なづな、ごぎやう、はこべ、ほとけのざ、すいな、すいしろを雜せた粥を祝ふ、しかしこの七種の草を集めるのは面倒なので大抵は小松菜とはこべとなづなの三草粥位にして丁ふ。この風俗は支那から來てゐる。即ち支那では七日七種の若菜を羹に調じて食すれ

ば萬病を除き、災厄を救ふと傳へて居るのである、我國でもこれに倣つて今擧げた七草を選んで、古くは正月子の日に羹に調じて食し、後世は正月七日に七種の菜粥に調ずるの風を爲したのである。

○藪入 十六日、俗に地獄の釜の蓋もあく日、小僧さんは半年振りて阿母さんの許へ歸る。小僧さんの頭の中は阿母さんと妹と天ぶらとお壽司と活動寫真とで一ぱいになつて居る。各所の閻魔堂はなはだ賑ふ。

○寒二十一日間 白衣を着た若い威勢のいゝのが産土神うぶつちがみに詣で、水垢離みづかひを取る、「六根清淨ろくこんじやうじやうッ、六根清淨ろくこんじやうじやうッ」と掛聲はえらい、しかしガタ／＼もので齒の根が合はさらない。腰の鈴！

寒詣り走るかん／＼千鳥かな

紅葉の句だつたか。氣の利いた句だがそれだけだ。

○餅 食べすぎたら敷の子を少し食べること。

○羽根羽子板 古はこぎのこ、こぎ板と云ふ。世

諺問答曰略云初秋蜻蛉出て蚊を食ふ、こぎのこ形

蜻蛉に似て蚊を恐れしむの遊也、然らば昔は初秋等に弄あそ之歟。今は早春の弄物となる。唯女子を專とす。(守貞漫稿)

○萬歳烏帽子 直衣、大黒頭巾などの扮装にて鼓を打ち歩く。正月に限りたる一種の門附である。

○花 寒梅、早梅、迎年菊むかひあけきく、沈丁花しんぢやうか、福壽草。

○食品 雁、鴨、鮎、鮭、鱈、鯛、ひらめ、沙魚、芝蝦、伊勢蝦、牡蠣、蜆、獨活、葱、大根、菜、蜜柑、ころ柿、其他いろ／＼

○紙鳶

切つてやる心となれやいかのぼり 曉 臺

風をあげてゐる、よく高くあがつて居る、糸を持つて居る人も空に引上げさうに風糸の張りは強い、風に靈があつて、空に高く上りたがつて居るのを、人間が妨げて居るといふやうな感じがするえ、可哀想だ、糸を切つて、思ふ存分飛ばせてやれ、

○歌留多 エネルギー浪費の遊び！ □□會の選

手なぞといふ歌留多^{カルクメニア}狂に碌な人間はない、甚麽に屁理窟をこねる人があらうとも歌留多は絶対に練習すべきものではない、歌留多によつて訓練されなければならぬやうな遅鈍なる頭腦は憐むべきである。但し血眼になつて他人の札を引奪らうとしないかぎりに於て歌留多遊びも新春のいゝおなぐさみである。

○双六 双六は古語にスグロクといふ、角なる采の六方に一より六までの數目を記したものの二個を一本の筒に入れ、盤上に振り出し、その數の多少に隨ひ、碁子を進めて勝負を決する遊戯である。後世采を以てする遊戯はみなこのスグロクより變じ來つたものであるらしい、この遊戯はもと印度より起り、支那を歴て我國に傳つたものである。このスグロクは今では行はれない。「玉藻前旭袂」といふ淨瑠璃に、桂姫と初花姫といふ二人の姫が互ひに命を庇ひ合つて、果てしがつかないので、双六で勝負を争はせ、負けた方の首を取るといふ

齣がある。あはれに美しい物語である。本當の双六遊びは徳川時代の始には漸く廢れて、新に佛法双六、官位双六などといふ簡易な遊戯に變形せられた、これは名は双六とはいふが、古法とは大いに趣を異にして居るものである。一枚の大紙に天臺の名目、官位の階級などを記したもので、全く婦幼に佛法の名稱、有識の次第を心得しめんために作られたものである。これが後世の繪双六の起原である。而してこの双六には始め采を用ゐず、六本の算木、又は六角に削つた細長い木に、佛法双六の法は南・無・分・身・諸・佛と記し、官位の方は詐・品・位・階・等・級の六字を記したのを用ゐた。これは古法の采は當時に至り博徒の手にするものとなつたので忌み嫌つたからでもあらう、扱てこの佛法双六から一變して淨土双六が出來、これから一般に繪双六となり、道中双六、出世双六も出來て、また采を用ゐるやうになつたのである。

○初天神 二十五日、東京では龜戸の天滿宮が賑

ふ。

○うそかへ 筑前の太宰府天満宮にて正月七日の夜に行ふ祭事。當夜參詣の人々は木の枝其の他のもので作つた鶯の鳥を袖のなかに匿してゐて、行き遇ふ人々と互ひにこれを交換する。その鶯は神社から出すもので、その中に黄金製の一個あると云ひ、これを得るものが最上の吉であると言はれて居る。東京でも龜戸の天満宮が太宰府に倣つて安政三年から鶯替を始めた。但し龜戸は正月二十四及二十五の兩日、晝中にこれを行ふのが例である。その頃谷文晁、太田蜀山、龜田鵬齊等が相伴つて初天神詣を爲し、鶯鳥を得ようとして天満宮に請求したが既に賣り盡した後だったので、文晁は矢立から筆を取り出して鶯鳥の形を描いた。蜀山は「この神のまことの道のあらはれて、うそは賣切申候」と口ずさんだといふ。神社では文晁の繪と蜀山の狂歌とを上梓して、鶯鳥の賣り切れた時には、これを出すことにして居るさうである

往昔はなほ太宰府に於ける如く、人々が鶯を交換したのであるが、其間に摸掬が紛れ込んで、交換の間に人の財物を抜き掠めることが多くなつたので、遂に相互に交換することを禁ずるに至つた。この頃は祠前に鶯を賣る店が出て居る。鶯は柳の木で作り、尾と嘴とは赤く塗り、背部は緑で金箔が附けてある。

原始藝術のなつかしきがある。大小數種あつて大は十五六錢、小は一錢位。縁起を印刷した紙に包んである。參詣人は之を購つて、鶯取換所と貼札のしてある社務所に行き、その購つた鶯を出して、社務所から出すものと取換へるのである。鶯替は開運の効があるといふので、又鶯替といふことが珍らしいので、當日は參詣者が雲のやうに集る。「うそ」とは本來「嘯く」の義であるけれども、この神事では、虚言の義に解し、從來の凶事がうそになつて、吉事と取換へられるといふ意味にして、これを行つて居る。